

資料(4)

クロボトキン、麻生義訳「サンジカリズムと無政府主義」

(昭和二年1927十一月二十日金星堂発行)

一、さまざまな方面から、サンジカリズムとは何であるか？ また、アナキズムに対するサンジカリズムの關係はいかなる形式であるか？ という質問をよくうける。そこで我等はこれらの質問に答えるために、ここにできるだけだけの説明をしようと思う。

事実においてサンジカリズムは古くからの戦法——イギリスの労働者がすでにずっと以前に、かれらの避難所として、しかも非常に有効な避難所として利用した古い戦法にあたえられた新しい名前にすぎない。その古い戦法というのは直接行動、即ち経済の領域に於て資本に対抗する労働のことを指しているのである。この種の闘争形式は、かれらの非常によく使いたれた武器であった。そこですでに十九世紀の前半にイギリスの労働者は、直接、投票権を獲得することなしに、ただこの武器のみを利用して大きな経済的利益を収めた。そして強固な労働組合組織をこしらえ、そのうえ支配階級に、労働法の制定にあたつてかれら労働者の要求を承認するように強いものだ。勿論、その労働法なるものは非常に広い範囲の政治的選挙権、被選挙権をも含んでいたのである。

そこで経済的領域における直接行動は、政治権力の譲りわたしを強制すると同時に、経済的に有利な結果をおさめるために、重要な武器であることを自ら明かに示していた。

かくのごとき思想がイギリスでは明かな発達を示したのであるが、その具体的なあらわれとして、一八三〇年から一八三一年にかけて、ロバートオーエンは大規模の国内的な労働組合と、労働者の国際的な団体をこしらえようと計画した。それらの組合や団体は直接行動によつて資本とたたかい、これを戦いとうとしたのである。だがイギリス政府の悪意にみちた迫害はかれにこの考えを放棄するように強迫した。政府のこうした迫害があつたので、政治的実権をうる必要を感じて、これを獲得するがために、非常に進歩した、強固な、そして同時に一部分は労働者の秘密結社の連合組織を利用するところのチャーチスト運動が起こった。

ここで、イギリスの労働組合は政治上においてその最初の訓練を受けたわけである。だが、かれらは直ちにかれらが全力をあげて政治的煽動を支持しようとも、この煽動はかれらに何等の経済的利益をもたらさないこと、ストライキと革命によつて搾取者、及び立法家を駆逐するより以外に経済的利益をおさめる方法の無いことを熟知するにいたつた。かれらはかれらの生活条件の真面目な改良を議会に期待していることが、如何に甚しい誤謬であるかということを知つたのである。

二、フランスの労働者もまた全く同様の結論に到達した。フランス人をしてひとつの共和国を形づくらせた一八四八年の革命は、政治的煽動がまったく無力であり、政治的勝利そのものでさえも、何等有利な結果を伴うものでないことを労働者に確信させた。もし労働者が直接行動によって支配階級を排撃するものでない限り、労働者の生活条件は何等根本的な変革を経験しないものであることを痛切に感したのである。

革命はフランス人にいまひとつの別な教訓をあたえた。それはフランス人が産業的生産の新しい形式——即ち生産に於ける労働者の利益の分けまえをかれらに保証する新しい形式が見出されねばならぬときに、それから資本によって労働者を搾取する組織を終結しなければならぬときに、知識上の指導者はほとんど全く役に立たないものであることを知った事実である。一八四八年の四月、五月、及び六月にひらかれたルクセンブルグの委員会に於て、同じく一八四九年に、特にこの問題の研究のために選拔、派遣された会議に於て——それには百人以上の社会民主党の代議員も加わっていたのであるが——討議の結果、労働者はいわゆる指導者というものがかれら労働者のために何の役にも立たないものであるということを明瞭に知るにいたった。そこでかれら労働者はかれら自身で社会革命の重要な原則を決定しなければならぬ。その原則にしたがって運動を実際効果的ならしめるために、労働者自身が運動しなければならぬことに気がついた。

三、

資本に対抗する労働者の直接行動、並びに労働者のために資本家の搾取を廃棄することの可能な経済組織をとるべく、必然的な、そして具体的な形式を考へること、これが労働者、特に産業のものと進歩したふたつの国、イギリス及びフランスの労働者が受けつた二つの理論であった。こうした訳で、一八六四年から一八六六年の間に、ロバートオーエンの古い思想が実践に移され、労働者の国際的な団結——インタナショナルがその端緒をひらいたときに、この新しい組織は上に述べた二つの根本的な理論を土台とした。イギリスの労働組合の代表者とそれからフランスの労働者——主としてブルウドンの後継者であつて第二インタナショナルを世界的に押し拡げるように主張した人びと——のインタナショナルが生れたときに、聯盟は労働者の解放は労働者自身の仕事でなければならぬ。そして今後は国際的土台から支持されている大きなストライキによって資本家と戦わなければならないという理論をもっと力強く宣言した。インタナショナルはヨーロッパの恐るべき擾乱をひきおこした。それから中産階級の間にも絶大な恐怖をひき起こさせた。これがインタナショナルの最初の二つの実行動であった。

それに加えて二つの大きなストライキがあつた。その一つは英国の労働組合から支持されたバリーの罷業と、いま一つはイギリスとフランスの労働者によって支持されたゼノアの建築労働者の罷業である。

ただ、それだけではない！労働者たちはインタナショナルの会議の席上で、国家が議会制度によってその支配権を維持しようとしていることとか、そのような努力は全く不合理であるというような問題については、最早つきこんだ討論はしなかつた。そして、かれらは社会の革命的再建築という根本的な問題を論議し、以前と比べて遙かに實際的な効果を示してきた思想——ゼネラルストライキの思想を行動に移すことを決定した。社会革命によって社会は組織を全然改められるのであるが、社会革命によって組織を改められた社会はいかなる政治的形式をとるべきであるかという問題に関して、ラテン諸国の聯盟は中央集権的国家を造るべきだという一派の思想からは明かに分離した。かれらは自由共産の組織は資本主義の搾取からは完全に解放され、一つの自由共産体を単位として、他の自由共産体と結合し、さらにそれを根拠として次第に大きな地方的な、それから国家的な統一をとるところの聯合組織である。

現代サンジカリズムの二つの根本的理論たる直接行動と、社会生活の新形式を考案する理論は労働組合の聯合にその土台を据えている。この二つの根本理論は最初インタナショナルの指導的理論に他ならなかつた。

しかもその当時既にインタナショナルの内部に、政治行動に関して二つの異つた潮流があつて、それが各国の労働者を分立させた。その一つはラテン系の潮流で、別な一つはドイツ系の潮流である。

インタナショナルのフランス人は主としてブルウドンの支持者であつた。ブルウドンの主動的思想はつぎのごとくである。

——既成のブルジョア国家を×××××、その代りに労働組合特有の組織を置くことにする。その組織は本質的に社会のためになるものならば何でも一切のものを管理し組織しなくてはならぬ。生活必需品の生産、人間の労働によって得られる凡ての生産物を正當に交換することも、生産し得られる凡てのものを分配し、消費すること——これらの一切を労働者と組織によって不都合なくやってくれる。もしこれらのことを労働者が遂行するようになると、×××××がなくては運用できないことは少しもないという事実を我等は知るのである。必要な一切のものの生産や、生産物の正當な交換や、正當な消費はただ労働者のみが解決することのできる問題だ。労働者がこの重大な問題をなし能うときに、すでに存在する政府や宗教政治や×××××でなければ出来ないことは一体何であるか！労働者が組織できないことは地上に一物もない。

しかし、インタナショナルの発起人であるフランス人のなかにも、また共和国や或はまた自治体を建設するために政治的に戦う人が、すなわち政治運動を一部分肯定しようとする人が何名かいた。かれらは政治運動についても何も知らずにいてはならないと主張した。何故かならプロレタリアは君主政体のもとに生活しているか、共和国か、または自治体のもとに棲息しているかによって影響を受けるので、政治運動はかれらプロレタリアに決して無関係であるということとは出来ないと言ふのである。かれらは自らの経験から、保守主義者や帝国主義者の勝利はあらゆる方面において退歩を意味するということ、労働者の巨大な権力を發揮すれば資本家の攻撃的な政治と闘ふことができると思へた。かれらはかくのごとく政治に対して多少積極的關係のある態度を採っていたが、選挙運動や、選挙

の効果や政党的離合集散の絶間ない態度のあいだに、労働者階級解放機関を見出そうという考えを拒絶していた。

こうして幾何かの反対はあったが大体においてフランス、スペイン、イタリアの労働者は、その綱領の中に過ぎの言葉を挿入することに意見が一致した。一切の政治行動は経済行動に従属しなければならぬ。

イギリスの労働者中には政治闘争に賛成する若干のチャーチスト運動家もいた。それからドイツ人は二度共和国をこしらえて失敗したフランス人のような豊富な経験は少しも持たなかった。かれらは本来のドイツ帝国にあらわすべき議會を信じていた。それだけではない、かのラッサールは——それは今日でもなお有名な話だが——その当時新に建設されたドイツ聯邦帝国のカイゼルが社会主義化されるであろうことと、とりとめない希望をつないでいた。

このようなわけでイギリス人も、またドイツ人も議會行動を否認しようとは思わなかった。かれらは議會を信じていた。そしてインタナショナルのイギリス語とドイツ語の綱領のなかに、一切の政治行動は方法として経済行動に従属していなければならぬ、という修正項目をつけ加えた。かくてブルジョア議會を信頼する古い思想が再び復活するに至ったのである。

その結果一八七〇年、並びに七一年の戦争でドイツがフランスを打ち負かしたとき、フランスが地に叩きつけられて、フランス労働者の精華であるバリーのプロレタリア三万五千人はバリーコンミュン崩落後、ブルジョア軍隊から虐殺されたとき、そしてフランスで労働者のインタナショナルが禁止されたとき、マルクスとエンゲルス及びその支持者たちはインタナショナルの内部に古ぼけた政治行動をみちびき入れようと企んだ。しかも労働者を好餌をもって釣るために労働者の立候補という形式さえ採用するように決定した。今までプロレタリアの間に絶大な希望をあたえ、ヨーロッパの各帝国のあいだに戦慄の情をひきおこしていたインタナショナルの分裂はこうして起こった。

イタリア、スペイン、ユラ、東ベルギーとフランスからの二、三の逃亡者を加えて成立した聯盟はインタナショナルの変歪された方向から分離した。かれらは自分自身の新しい自由聯盟を組織したのである。そして、その頃から以後、次第に革命的サンジカリズム及びアナキズムの理論を發展させた。しかるに一方、反対派のドイツは新しく發展した社会民主党の指揮権をにぎった。ピスマルクはその頃戦争の勝利によってあらたに強固な基礎をすえたドイツの帝國議會に代議士を送るための普通選挙権を民衆に与えたのであるが、社会民主党はこれよりも更に幾倍かの政治上の好結果を収めるために画策を続けた。

インタナショナルの分裂がかくして起こって以来、四十年間の歲月が経過した。いまや我等はその分裂の結果を判断することができ。なお進んで我等はいかなることが起こって来るか分析することができ、それはさて置いて、すでに現在に於いてもインタナショナル分裂後の四十年間に企てられたかれらの凡ゆる計画がおどろくほど無収獲であったことや、既成国家の中産階級のあいだでかれらが政治権力の略取と呼んでいるところの行動にかけられていた信仰はまったく役に立たないものであることを我等は曝露できる。

かれら政治行動論者が実行しようとしていた確信とは反対に×××××することはできず、反ってかれらのはうがブルジョア国家から略取された。かれらはブルジョア国家の道具である。かれらは労働者を搾取する上流もしくは中流階級の権力擁護の役をつとめる。即ちかれらは教会の、国家、資本の、専売経済の、まことに有用な道具なのである。

しかし、全ヨーロッパ及びアメリカに我等大衆によつて起こされる新しい運動を労働運動の新しい力と認める。その新しい力というのはインタナショナル本来の理論をなしていたもので、資本に対抗する労働者の直接行動、即ち直接闘争と、労働者を解放するものは労働者自身であつて断じて議會行動ではない、という二つの信条である。

しかし、それではまだ明かにアナキズムではない。それを我等はもとと説明しよう。われらは主張する——労働者が中央集権と宗教政治の偽造（三十四字伏字）、労働者の解放はなしとげられるものではない。××とブルジョア的秩序の力をかりて、（十一字伏字）これを守るようにプロレタリアに強迫する。この事實は（十三字伏字）決してプロレタリアの味方ではないということを示している。かくのごとき理由によつて労働者はこれら一切の偽造と詐偽と瞞着とを大地にたたきつけない以上、労働者の解放はなしとげられない。

しかし、この四十年来、アナキストは労働者と——自分の手の中にかれらが解放せられるか否かの運命をにぎっていて、いまだ勝利を続けてきた資本のために搾取される労働の最後の闘争としてもつともすぐれた方法である直接行動を敢行している労働者と——協力すると同時に、一方では最近の四十年間を通じてアナキストは何等役に立たない選挙運動をもつて労働者を誘惑しようとして徒輩と抗争しつづけた。この全時代を通じてアナキストは労働大衆の間に希望をよびおこさせ、労働組合がドックから、鉄道から、鉱山から、工場から、田園から、倉庫から、富を××することができるところの新しい理論を作り出すために忙忙をきわめた。なぜかなら、それらは少数の資本家の利益をはかるために存在してはならない。それは直ちに全社会の幸福を増進するために利用せらるべきものだからだ。

四、

一八二〇年から一八三〇年までのイギリスで、それから一八四八年の無意味な政治革命をなしとげたフランスで労働者の有意義な団体の努力は直接行動によつて資本に対抗するとともに、それに必要なさらに大きな聯盟をつくることに集中せよとする傾向となつてあらわれた。一八六六年から一八七〇年の間にこの思想は、そのころ丁度組織されたインタナショナルの指導的な理論となつた。しかし、一八七一年にフランスが敗北して、そのためにフランスの革命的勢力が崩壊したあとパリコンミュンが流産に終わり、ドイツが勝利を占めたあと、政治的要素がインタナショナルの中で強圧手段をとつて、その結果、ほんの一時的ではあったが政治的要素が労働運動の決定的要素でもあるかのような形勢となつた。

この時代から以後、ことなつた二つの潮流は絶間なく發展した。各々そのプログラムの方向にむかつて進んだ。凡ゆる立憲国で政治的意義の労働者集団が組織された。かかる労働者党は既成議會でその代議士の数を急速に増加するためになしうるかぎりのことは何でも構わずやつてのけた。これはわれわれが最初から予想した通りだ。また、投票数ばかりをかきあつめる代議士のために経済的プログラムの次第に低減されて行くことは当然避けられなかった。しかもそれは資本主義組織に新しい力をあたえ却つて古い秩序を伸ばすために役立った。同時に、そこでは社会主義的政治家がブルジョア急進主義の代表者と相対抗する形勢を生ずるにいたつた。何故かならこの二者は労働者の投票を獲得するために競争しなければならぬからだ。この競争にかつたためにこれらの社会主義者は、かれらの最初の意志に反してまでも全ヨーロッパにみながつた優勢な反動勢力と妥協して、これらを導き入れる援助をした。

かれらが一度、労働者のあいだに拡げた一切のイデオロギー——觀念と理想とはまったくその点で停止した。そして、かれらは国家中心主義の確信的な支持者となつた。かれらは地方自治の反対者であり、小国家の独立にも反対する人びとであつた。そしてかれらはその論理を支持する目的をもつて一派の歴史哲学を工夫し出した。そして、民衆に『史論唯物主義』だとか『唯物史観』という名前でお説教をはじめた。それによれば資本家の数が相互の競争によつて減じないあいだは社会主義的方向にすすむ何等の本質的な変革も可能でないと云うのだ。凡ゆる工業国に於て、今日眼前に見えている事実をかれ等は觀察の範囲外にはうり出している。英国やフランス、ベルギー、その他の資本家はきわめて簡単に産業のいまだ発達しない土地の民族を搾取し、東ヨーロッパやアジア、アフリカの幾百万の人間の労働を管理している。そこで、結論はこうだ。他人の労働によつて生活している人間の数はヨーロッパの主要な産業国だけに於ても、漸次に少くなる形勢は断じてない。現在ある以上よりも遙かに継続的に、しかも恐るべき程度にまで他人の労働によつて生活する者の数は増加した。そして、この数と同時に資本主義制度の永続をよるこぶ人間の数もまた増加した。そこでなお後には、既成国家の政治権力を獲得しようとする煽動方法の宣伝者たちは政治権力を要求するかれらの見解を根本的に破壊することのできる最も有力な敵と闘わねばならなかった。敢て議會的戦略が邪道であることを証明した凡ての人をかれらはインタナショナルから除外した。かれらはストライキを批難した。そしてあとでインタナショナルの内部にゼネストの思想が浸潤してくると、かれらは出来るだけの手段をつくし、もつとも野卑な方法でこの思想と闘争した。

五、

滿四十年もかくのごとき戦略が継続された。しかも今日では全ヨーロッパの労働者の大部分が、この方法から離れて行つたということとをすべての人が明かに知りはじめたようである。多くの人は嫌惡の情をもつてこの思想から離脱した。そして新しい方向に廻転しようとした。これが今日、われらが『サンジカリズム』に就いて余りにも多くのことを聞かされねばならなくなつた原因である。

だがしかし、資本に対する労働者階級の直接行動を擁護するいま一つの潮流——すなわち『サンジカリズム』の思想もまた古くから

の命脈を保つて、この四十年間に長足の進歩を遂げたのである。この思想は政府側からの凡ゆる迫害にも屈せず、資本主義的政治家の凡ゆる排撃にもかかわらず發展した。この潮流の絶間ない發展のあとを述べることや、あるいはこの潮流の理論を述べることや、並びに理論家たちが一方では政治党派である社会民主党と關係をつけたり他の一方では無政府主義と結びついたりした経過を明白に説明することは、きわめて興味ふかい問題だ。しかし、その問題を何から何までとり入れて詳細に記述した著作は、いまだ発表すべき時がきていない。否むしろ今日までそういう著述は書きあげられていないというほうがより正しいであらう。その歴史を書くには、『サンジカリズム』に及ぼした個人的な影響に注意を向けなければならぬ。そして同時にその歴史は現代思想を形づくつた大潮流の影響及びアメリカとヨーロッパに於ける労働者の自我意識の發生を記述したものである。自我意識は労働者の知識的指導者とは何等の關係なしに發生することのできたものであつて、もし、『サンジカリズム』の本当の歴史を書くには、そのことに特別深い注意を払わねばならぬ。

そこで我等が今日サンジカリズムの歴史について言える一切のことは第一にそれは単純な事実の上に立脚している社会主義の理論からは全く独立していたということ、第二に大工業の中心地に労働大衆が集積されたこと、そして最後に集積されたがためにこの大衆は過去の時代からうけつた職業組織上の伝統を正しく維持していたということである。かれらは公然たる聯盟や、それから秘密組織の結社をつくつた。そしてさらに進んで激成されつた搾取と企業家の傲慢ぶりを制肘するところの聯合体を建設した。搾取が激成され企業家が傲慢になると同じ比例で、組織された労働大衆は大きく強力になった。そしてフランス革命以来、文明民族固有の生活内容となつて階級的な闘争をふかく自覺して、かれら労働大衆の反資本主義的傾向はいよいよ明瞭にいよいよ決定的となつた。

労働者の叛逆をそれがたとえどのように微弱なものであらうとも、仮借することなく妨害し、その恐るべき特性をいささかも現わさないように圧迫するために、最近の四十年間、世界各国に於ける政治上の指導者はできるかぎりの努力を傾倒した。

だが、この四十年間に労働者の叛逆は絶間なく拡大し絶間なく力強くなり、そして労働者の意欲はつねに益々明瞭に表現されるようになりつたことを我等は知っている。次第に労働者はややもすれば単なる絶望を表現しやすいつつの特性を無くした。労働者と感情をしつくり同一にするとき、かれらの間に流れている思想が漸次に成熟しつたことを我等は認知する。それはつぎのような簡単なことばで要約できる。

——産業主は消えてくたせ！我等の生活を安全にさせ確かな存在をかれらの間に見出すように産業を指導することが、もし完全になしとげられないならばそこでは最早産業主とは手を切るがよい。生産物の性質が有害であるか、もしくわ、有利であるかを吟味しなければならぬことを忘れて、一時的な大きな利益を占有するために羊の群れに答をくれるように、無暗に生産を増すように強制することばかり知つていて、労働者と合理的に理解し合うことができない近視眼的な無能力な資本家から去つてしまわねばならぬ。富を淫しない戦争の準備に使うよりほかに使いみちを知らず、民衆が生産した一切の財産の三分の一を軍備——要するに（二十四字伏字）の

ために消耗するより以外の方法をわきまえない資本家とは絶縁せよ！汚物と貧困よりもっとほかの源泉から富の得らるべき近代科学のおどろくべき発見については——惨めさと貧困とは最も富裕な国に於てさえも、その大都会の人口の三分の一を呪うていることは決して伴われぬ事実だ——何ひとつ知らない奴等とは手を切れ！工業と商業の運用がただ一つの様式でしか行われぬならば、それと離別せよ！我等労働者はこの資本主義のベストを殺してしまえばそれでよい。それからさき、生産はいかに組織されるべきものかは我等が熟知している。

以上述べたところは文明化された世界に於ける凡ゆる労働者の家で実際に生きていた思想にほかならなかった。それについて徹底的に考えられ徹底的に物語られた。それはまた毎年のようにヨーロッパで、アメリカで、ドック労働者のスト、鉄道員のスト、鉱夫、織物工のストなどという形であられ、ついにゼネストとなって爆発するに至るべき一切の同盟罷工の根底をなす思想であったことを我等は認知した。——そのゼネストは自然の偉大な威力と比較されるほどの大きな闘争にまで直ちに成長する。そして同時に子供の遊戯にもひとしい議会内の小さないさかいは潔く身を引くであらう。

ドイツ人が赤い旗と松明のあかりを以て、段々と有利に拡大されている選挙の勝利を祝っている間に、経験ゆたかな西欧の民衆は「労働者階級の内的組織」という、浮わついた選挙運動などとは比較にならぬほどまじめな問題を、いかに実行するかについて、多くは沈黙を守りながら従事していた。この西欧の民衆が自ら没頭した思想は政治運動などよりも遙かに根本的な性質のものであった。かれらは自ら問うた。「労働と資本の間の避けがたい世界的混乱の結果はいかになるべきであろうか！産業に従事するものの生活方法、及び社会組織のいかなる新しい形式がこの混乱を生ずるか？」

これが即ちサンジカルズム運動の真の起原である。無知な政治家たちは、今日それを何か新しいものであるかのように見做す。

六、

我等アナキストにとってはこの運動は断じて新しいものではない。この運動の傾向がすでに古く労働者の国際聯盟（インタナショナル）のプログラムの中に於いて公式となつてあらわれたときに、我等はこれを歓迎したのである。また、この運動が政治権力奪取の過程における障害物であると考えているドイツの政治家たちのインタナショナルで攻撃されたとき、我等はこれを防衛した。スペイン人はその労働組合の組織をインタナショナルの支部と認めて密接な関係に置いた。我等は各国の労働者にむかつて、また、労働組合とインタナショナルの関係を丁度スペイン人と同様に処置すべきであると忠告した。この時代以来、我等はふかい同情を以て労働運動の凡ゆる段階を研究した。来るべき未来に於ける労働と資本のあいだの衝突はいかになり行くものであるかということ、及び社会は一切の富の生産者から恩恵を被っているもので、それに対しては当然の報酬をすべき義務のあるということについて、社会の眼をひら

かしめるのはサンジカルズムの運動でなければならぬことを我等は知ったのである。そのサンジカルズムの運動を思考する人間——インテリゲンチヤに袋路から逃げ出す道をおしえるところの唯一の運動である。この袋路のなかに今日の資本主義は若い青年を追いこんでいるのだ。

サンジカルズムの運動に、社会を新しく組織する際におけるかれらの任務に関しては誤まりなき意見を与えたものはアナキストであった事実を、アナキストは決して明かに自負していない。また、人類を著るしい進歩に導くものは大きな精神運動の指導者であると主張するような、むしろ滑稽な立脚点を、かつてアナキストは代表しようとしたこともない。だが、我等は我等が使用する言葉のほとんど正しい意味に於いて要求することのできる一切は、今日サンジカルズムの重要目的をつくり出したところの古くからある思想のふくむ重大な意味を、最初からよく理解していたものはアナキストであるという厳然たる事実である。それはイギリスに於ては、ゴドウィン、ホジキンや、グレイ及びその後継者、フランスではブルードンによって発展せられた思想である。

その思想は、現存する資本主義の搾取並びに国家にかわつて生産、交換、分配を労働者の組織によって占有しなければならぬ。そして社会の新しい形式をつくり出すことは、労働者の組織の義務であり課題である、というのだ。

この二つの根本的な思想はなにも我等の発見ではない。それはまた何物の発見でもない。生活それ自身がこの一つの根本的思想を、二十世紀の文明のうえに反映させたのである。そして我等の義務には、ただ、この理想を現実に移すことである。しかし、我等の誇りは——それを理解しているということであり、さらに以前と同様、今日もなお誠実な気持でこの思想を支援しているということである（注45）。

（注45）本文は麻生義の訳書（平凡社「社会思想全集」第31巻、昭和三年九月刊）から転載した。訳文の原著についての麻生の解説は掲載されていないので原本はわからない。多分テキストは Syndicalismus und Anarchismus, 1908 であろう。事実、麻生の別の訳書、春陽堂昭和三年（一九一〇）八月刊の「クロボトキン全集」第八巻にもクロボトキンの本論文が掲載されており、その緒言によれば「サンジカルズムとアナキズム」は最初クロボトキン等の機関紙「ル・タン・ヌーヴォ」紙に掲載されたものを、前記のように一九〇八年（明治四十一年）に、ドイツに於けるサンジカリストの機関紙「デル・サンジカリスト」（編集者オーガスチン・スーシー）からドイツ文で出版されたものである。私見ながらクロボトキンの本書は、サンジカルズムの批判としてはかなり透徹を欠いていのではないかと思うが、スーシー等が出版している経過からみて、その間の事情がうなずけるような気がする。

なお、麻生は、平凡社（昭和三年九月）、（春陽堂昭和三年八月）の訳書のほか、それらに先立って昭和二年十一月、金星堂書店から社会科学叢書第二編、クロボトキン著「サンジカルズムとアナキズム」を出している。この冊子には、マラテスタの「アナキズムとサンジカルズム」を付録として掲載している。しかし、後者は麻生訳ではなく「労働運動」誌に訳載されたものを転用した

ものである。

— ついでながら、地底社（石川三四郎）は昭和四年（一九二九）にマラテスタの「無政府主義組織論」を冊子として出版した。これには付録として、麻生と同様、「労働運動」誌からマラテスタの「アナキズムとサンジカリズム」訳文を添えている。

麻生義については、アナキズム文献的にアナキズム運動に関与し、麻生の書いた「クロボトキンとロシア革命」の小論が、クロボトキンがサンジカリズムに接近的であったとして、八太舟三が「クロボトキンの思想的背景と目標」（「無政府主義研究」昭和三年六月号掲載）の中で麻生論文を反駁している。八太の右の小論は群馬・黒色戦線社、昭和四十六年七月刊、八太舟三遺稿集「無政府共産主義」の第54頁に詳しい。

— 麻生の金星堂版社会科学叢書については綿引久農夫の来翰によった。